

列女伝図の研究(二)

— 和林格爾後漢壁画墓の列女伝図 —

黒田 彰

〔抄録〕

小稿は、昨年度の拙稿「列女伝図の研究—和林格爾後漢壁画墓の列女伝図—」(『京都語文』15、平成20年11月)の続稿に当たるもので、三、中室西、北壁四層の列女伝図、1西壁四層の列女伝図(19—28)を収めたものである。本文中の「口絵(番号)」は、その前稿所収のカラー口絵の図版番号を指しており、是非併せて参照されたい。なお続稿として、2北壁四層列女伝図(29—35)、

四、中室南壁の列女伝図(36—43)及び、関連する別稿「顧愷之前後—列女伝図の系譜—」を予定する。

キーワード 劉向、列女伝図、顧愷之、列女仁智図卷、北魏司

馬金竜墓出土木板漆画屏風、和林格爾後漢壁画墓

三、中室西、北壁四層の列女伝図

1 西壁四層の列女伝図(19—28)

19 魯秋潔婦図(口絵19)

十 榜題「魯秋胡子」「秋胡子妻」

西壁四層の最初の列女伝図である。西壁三層が列女伝卷一、卷二の順を追うのに対し、四層がいきなり、列女伝卷五節義伝から始まり、

その後、卷三、卷四に戻って、再び卷五が続くことについては、前述した如くである。図四十五に、魯秋潔婦図を掲げる。本図の基づいた列女伝卷五・9の粗筋を示せば、次の通りである。

魯秋潔婦梗概

魯秋潔婦というのは、魯の秋胡子の妻である。秋胡子は、陳国に仕官するため、結婚して纒か五日目に家を発ち、五年を経て漸く帰郷する。帰郷の途次、道端で桑を摘む、一人の美しい女性が目に入る。悦んだ



図四十五 魯秋潔婦図

秋胡子は、車を降りて、次のように言う。「あなたは暑い日向で一人、桑を摘んでいる。私は遠くからやって来た。出来れば桑の木蔭に宿り、食物や手荷物を下ろして、共に休憩したいのだが」と。しかし、女性は桑の葉を摘み止めない。

秋胡子はさらに言う、「諺にも、苦勞して田を作るより、豊年に遇う方が良い。懸命に桑を摘むより、貴い身分の人に出会う方が良い、と言うではないか。私はお金を持っているので、あなたにそれを差し上げたいと思う」と。すると、その女性が言うには、「ああ、一体私の努めは、桑を摘み苦勞して働き、糸を績いで布を織り、衣食を整えて、父母に奉仕し、夫や子供を養うことである。私はお金が欲しい訳ではない。私の願いは、あなたが不道徳な思いを抱かず、私もまた、ふしだらな気持を持たないこと。だから、あなたの手荷物とお金の箱をし

まわれよ」と。それを聞いた秋胡子は、遂にあきらめ立ち去った。さて、秋胡子は家に着き、母にお金を献上する。母が妻を呼びに遣ると、驚くべきことに、やって来たのは、先程の桑摘みの女性である。それを知った秋胡子は、ただひたすらに恥じ入った。妻は、次のように言う、「あなたはかつて身なりを整え、親元を辞して、仕官のために出発した。あれから五年も経って、漸く帰郷するのであれば、誰しも当然、喜び勇んで駆け走り、親に会いたく思う筈である。それなのに、あなたと来たら、道端の女性をお金で誘惑しようとする。あなたの行為は、母を忘れた不孝に当たり、行いを汚す不義を働くことである。不孝、不義はやがて不忠、非理に繋がり、孝義共に失った人が、立派な最後を遂げることはあり得ない。私は、あなたのような不孝不義の人を、これ以上見ていられない。あなたは別の女性を娶られよ。私は二夫には見えない」と。言い終わると、妻は東の方へ走り出し、そのまま河に身を投げて死んだ。孔子は、「善行を見たら、その行為がやり止しとなることを恐れて直ちに手を差し伸べる如く、出来る限りの助力をしてやり、不善を見たら、熱湯に触れて手を引く如く、なるべく早く遠ざかれ」と述べている(論語季氏)。これは、秋胡子の妻のことを言うのである。

本図は、保存も良く、南壁一層に描かれた36魯義姑姉図と共に、当墓屈指の美しい列女伝図の一つに上げられよう。これまでの言わば肖像画面風の、静的な図像とは異なり、動的且つ、具体的な図像である点、四層の右方から列女伝巻三、四、五を描き始め、四層の左方へ戻って、



図四十六 魯秋潔婦図

描き、二人は共に右を向いて立っている。秋胡子がそれとは知らず、美人(妻)に声を懸けている場面である。秋胡子は何かを差し出している(黄金であろう)。妻の右には、葉を繁らせた桑の木及び、妻の腰の右辺りに、枝に掛けられた籠(筐)が描かれ、妻が一心に桑の葉を摘む様子を表わしている。

図四十六は、後漢武氏祠画像石の武梁祠三石一層に描かれた、魯秋潔婦図を示したものである(榜題、右から「秋胡妻」「魯秋胡」。左に、荷物を肩に担いだ秋胡子、その右に、枝を繞めて葉を摘む妻が描

画面を広く取り、再び巻五の本図を描くという、作者の意図及び、その強い意気込みを読み取ることが出来るよう。(それらの事情は、他の中室壁画との関連なども含め、一考の要がある)。本図は、まず左に、進賢冠を被った秋胡子、右に、髪を高く結い上げた妻を

かれている。妻の姿は、後掲図四十八、図四十九も同じであり、図四十五本図もそのように描かれているものと思われる。二人は、共に右を向いて立っているが、妻が振り返っていることに、注意すべきである(他図も同じ)。妻の右には桑の木及び、枝に掛かった籠が描かれている。図四十六を見ると、榜題も酷似するが、本図と図四十六との構図が、全く一致していることが分かる。このことは、非常に驚くべきことと言える。図四十七は、同じ後漢武氏祠画像石の前石室九石二層に描かれた、魯秋潔婦図を掲げたものである(榜題「魯秋胡」「秋胡婦」。同じ武氏祠のものながら、武梁祠のそれ(図四十六)とは、随分異なった印象を受ける。まず図の左右が反転していることに加え、桑の木や籠などが見当たらず、さらに子供や従者等が、多数描き加えられているからである。人物は全て左を向き、右から三人目



図四十七 魯秋潔婦図 (前石室九石二層)



図四十八 魯秋潔婦図

の秋胡子は、長剣を地面に突き、左端の擱(女性髪を包む飾り布)を着けた妻は、夫の方を振り返っている。場面の左方では、子供が妻の左袖を引いている所から、図四十七は、夫と再会后、家を出て投身自殺しようとする、物語の

最後の場面を描いたものなのかもしれない(列女伝本文の妻の言葉に、「奉_二親_一、養_二夫子_一」とある)。図四十八は、四川新津石棺に描かれた魯秋潔婦図である。それは、図四十五、図四十六の左右を反転させたもので、夫は長剣を佩いているが、構図は全く同じものと言って良い。妻が振り向いていることも、図四十六、図四十七と同じで、どうやらそれが、秋胡子妻の一般の描き方であったようだ。このように内蒙古、山東、四川という、広い地域に互り、同一構図の魯秋潔婦図の分布していることは、改めて驚くべきことなのであって、このことはやはり、漢代列女伝図の粉本が当時、流布していた事実を、強く物語るものである。図四十九は、伝顧愷之筆の摸刊図である(榜題「秋

胡子」。当図を前掲の諸図と比較してみると、当図もまた、本図(図四十五)、図四十六、図四十八と同一の構図をもつものであることが、はっきりと確認出来る。このことは、二つの点で極めて重要で、一つは、遙か後代の重刊本ながら、伝顧愷之筆摸刊のそれが、大変古い魯秋潔婦図の様式をよく留めていることから、顧愷之筆の信憑性が、学問的に俄然、高いものとなる点である。もう一つは、中国美術史に屹立する、顧愷之の画風の成立に関して、例えばその列女伝図の場合、顧愷之は、漢代列女伝図の様式に深く学んだらしいことを、強く示唆することである。この点は前述、現存する顧愷之の列女仁智図巻の具体的内容とも絡めて、なお今後の課題とすべき問題と言えるであろう。そして、顧愷之以前の魯



図四十九 魯秋潔婦図(伝顧愷之筆摸刊)

秋潔婦図として、現存唯一の彩色絵画資料である本図が、文字通り図四十九の源流に当たるものであることは、最早言を俟つまい。

20 周主忠妾図（口絵 20）

† 榜題「周主忠妾」

図五十に、当墓の周主忠妾図を掲げる。本図の典拠となった列女伝巻五・10の粗筋を示せば、次の通りである。

周主忠妾梗概

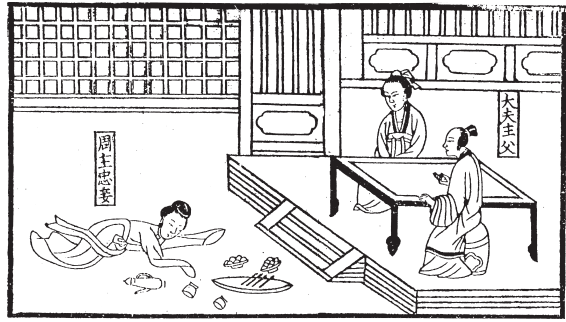
周主忠妾という女性は、周の大夫の妻の媵妾（媵婢とも。腰元）のことである。その大夫は主父と呼ばれた。或る時、衛を出て周に仕え、二年後、帰国することになったが、隣人と密通していた妻は、そのことが夫の主父に知られることを恐れ、また、密通相手の隣人も同じくそれを心配する。妻は、「心配されるな。その対策には、私が毒酒を



図五十 周主忠妾図

作り、蓋を閉じて夫を待構えているから」と言う。それから三日経って、主父が家に到着すると、妻は、「私はあなたを労るべく、酒の蓋を取らずに準備していた

所である」と言つて、媵婢に酒を注いで勧めさせる。媵婢は内心、それが毒酒であることを察しつづ、思案するよう、もしそれを主父に勧め飲ませれば、主父を殺すことで不義となり、かと言つて、そのことを口にすれば、主人の女性を殺すことで不忠となつてしまふ、と。媵婢はどちらとも判断が付かず、ために態と倒れて、酒をひっくり返す。主父は怒つて媵婢を笞打ち、その場はやつと収まつた。一方、妻は媵婢がそのことを口外するのを恐れ、別の過ちに託けて、媵婢を笞で打ち殺し、その口を塞ごうとする。媵婢は、このままでは死ぬことを悟りながら、何としてもそのことを洩らそうとはしない決意である。折しも主父の弟が事の次第を聞き付けて、詳しいいきさつを主父に告げ知らせる。主父は仰天して直ちに媵婢を救い、代わりに妻を笞打ち殺した。主父が内々、人を介して媵婢に、「どうしてお前は、そのことを承知しつつも、決して口外せず、反対に死に掛けたのか」と問わせると、媵婢が言うには、「私が口外することは、主人を殺して自分が生き、さらに主人の名を汚すことになるからである。自分が死ねば、それはそれだけのことである。なのに、どうして口外しようか」と。主父は、媵婢の節義が高く、その心が貴いものであることを知つて、媵婢を娶り妻にしようとする。しかし、媵婢が固辞して言うには、「主人が名前を汚して死んだにも関わらず、腰元の私だけが生き残っているのは、無礼というものである。主人の地位に従者の私が取つて代わることは逆礼というものである。無礼、逆礼のどちらか一方だけを取つても、人には堪え難いものなのに、その両方が当嵌まる今の状況は、到底私の生きてゆけるものではない」と言つて、媵婢は自殺を



図五十一 周主忠妾図 (伝顧愷之筆摸刊)

図る。主父は、それを聞いて求婚を断念し、代わりに引出物を沢山持たせて、媵婢を嫁がせようとする、四方の者達が競って妻にしようとした。詩経に、「言葉にも徳にも報いがある」(大雅「抑」)と歌われるのは、この忠妾のことである。

本図は、残念ながら発掘当初から大きく破損しており(図一参照)、榜題が辛うじて残るものの、周主忠妾の上半身の剝落が、殊に甚だしい。周主忠妾図については、列女伝図の類例が管見に入らない。図五十一に掲げるのは、伝顧愷之筆摸刊本の図像である(榜題「大夫主父」「周主忠妾」)。図五十一は、毒酒を主父に献じ兼ね、態と躓き倒れた周主忠妾を描いたもので、本図とは聊か趣きを異にしている。本図は、その周主忠妾を肖像風に描いたものと思われる。

21列女A、22列女B図(口絵21、22)

十 榜題

図五十二、図五十三に掲げるのは、仮に列女A、列女Bと名付けた、内容未詳の二図である。該当する可能性があるのは、列女伝巻五・11、

13-15、巻三・1、2などだが(図二参照)、なお後考に俟ちたい。

23許穆夫人図(口絵23) 十 榜題「許穆夫人」

図五十四に掲げるのは、当墓の許穆夫人図である。既述の如く、本図から列女伝巻三仁智伝へと戻っている(19、20は、巻五節義伝9、10であった)。本図の基づいた列女伝巻三・3の粗筋を示せば、次の通りである。

許穆夫人梗概

許穆夫人というのは、衛懿公いこうの女で、許(河南省)の穆公の夫人のことである。最初に許が衛に求婚し、斉もまた、同じく求



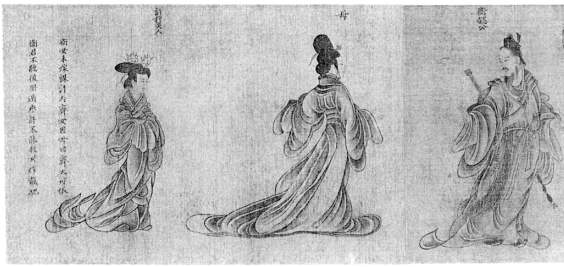
図五十四 許穆夫人図



図五十三 列女B



図五十二 列女A



図五十五 許穆夫人図

婚した。懿公が女を許に与えようとすると、女が傅母に言わせるには、「昔、諸侯が女子を儲けたのは、大国に援助を求める伝として、それを送るためであった。思えば目下、許は小国の上、我が国からも遠く離れているのに対し、斉は大国であって、しかも我が国に近い。今は強国が英雄とされる時代である。もし辺境に蛮族が侵入すれば、我が国の一大事となろう。そのような折、大国に救援を求める手段として、そこに私がいるのは、願ってもない便りではないか。あなたは今、近い大国を擱て、遠い小国に付こうとされている。一旦火急の国難に見舞われたならば、あなたは一体、誰を相手に国家の存亡を計ろうと言われるのか」と。けれども、衛侯はその言葉を聴き容れず、女を許に

嫁がせる。やがて翟が衛に攻め込んで、衛の軍隊を大破する。しかし、許にはそれを救う力がない。衛侯は遂に出奔し、黄河を涉って南方へ落ち延び、楚丘に至る。結局、斉桓公が出向いて衛を保ち、楚丘に城を建設して衛侯を住ませたのである。こうなつて始めて衛侯は、許夫人の言葉に耳を傾けなかつたことを悔いた。衛が翟に破られた時、許夫人は車を駆つて、衛侯を訪い慰めようとした。けれども、協わなかつたので、ために怨んで、詩（詩経国風、鄘風「載馳」）を作つた。

本図は、左を向いて立つ許穆夫人を描いている。顔の部分は、発掘時には既に破損していた（図一参照）。図五十五に示したのは、故宮博物院蔵列女仁智図巻の2許穆夫人図である（傍題「斉使者」「許使者」「衛懿公」「母」「許穆夫人」、頌「衛女未嫁、謀許与斉。女因母曰、斉大可依。衛君不聴、後果遁



図五十六 許穆夫人図 (伝顧愷之筆摸刊)



図五十七 曹釐氏妻図

の見当たらないことが不審だが、右から四人目の女性がそれであろう。図五十五、図五十六の關係は、両図の榜題からも察せられるように、基本的に同じ構図と見られるものの、図五十六においては、まず図五十五の右側の二人の使者が、反転して左側へ移り、次いで、傳母と夫人の二人の位置は、そのままであるが、左右が入れ替わるなど、やや複雑な変化が起きている。さて、本図は、向きこそ違うものの、図五十五左端、図五十六右から四人目の、酷似する両許穆夫人図の源流に当たるものと考えられる。

24 曹釐氏妻図 (口絵 24)

十 榜題 「曹僖氏(妻)」

図五十七に、当墓の曹釐氏妻図を掲げる(釐は、僖とも記される)。本図の基づいた列女伝巻三・4の粗筋を示せば、次の通りである。

乖。許不能救、女作「載馳」。併せて、図五十六に、伝顧愷之筆の摸刊図を示そう(榜題「衛懿公」「傳母」「許使者」「齊使者」。図五十六の榜題に、許穆夫人

曹釐氏妻梗概

曹(山東省)の大夫釐負羈の妻のことである。晋の公子重耳が亡命し、曹を訪れる。ところが、曹恭公は礼を尽くさないのみならず、剩え重耳の駢脅(一枚肋)であることを聞いて、その宿舎に忍び寄り、重耳が浴する機会を伺って、帳の隙間から間近にそれを盗み見る始末である。その様子を見ていた負羈の妻が、夫に言うよう、「私が晋の公子を観察するに、公子の従者の三人は皆、国の宰相級の立派な人ばかりである。その三人が共によく一致協力し、主人を輔佐しているので、ゆくゆく公子はきっと晋国を我がものとするであろう。そして、公子が晋に帰国した暁には、必ず諸侯の覇者となって、以前、自分に無礼を働いた国々を伐つに違いない。差し詰め我が曹などは、その最初の国である。我が曹がそのような国難に見舞われた際、あなたがそれを逃れることは、極めて難しい。それなのに何故、あなたは今、曹君とは別行動を取ろうとしないのか。私は次のように聞いている。子供や君主のことも知りたければ、その親、また、臣下を見よと。現在の公子の従者達は、全員が大臣や宰相級の臣下であることからして、その者達の君主は、きっと覇者、王者であるに違いない。だから、その人に対し礼を尽くしておけば、将来必ず立派に報いられようし、逆に無礼を働けば、必ずその科で伐たれよう。禍いの到来は間近である」と。そこで、負羈は、食物の上に璧を加え載せ、壺に納めて公子に贈る。すると、公子は食物だけを受け取って、璧は負羈に返却する。果たして、公子は晋に帰国した後、早速曹を討伐したが、例外的に負羈の閭門だけは表彰し、決して兵士を侵入させることがなかったのである。



図五十八 曹釐氏妻図



図五十九 曹釐氏妻図 (伝顧愷之筆摸刊)



図六十 孫叔敖母図

そのため曹の士民は挙って、老人に寄り添い弱小の者を引き連れ、負羈の村閭へやって来たので、辺りはまるで門前市を成すばかりの有様を呈したのである。

本図も相当傷んでいるが、右を向いて立つ曹釐氏妻を、描いたものと思われる。図五十八に、列女仁智図巻の3曹釐氏妻図(榜題「曹愷

負羈」「妻」、頌「負羈之妻、厥智孔碩。見晋公子、知其興作。使夫饋殮、且以自託。文伐曹国、卒独見积」、図五十九に、伝顧愷之筆の摸刊図を掲げる(榜題「從者三人」「公子重耳」「曹愷」「壺殮」「曹愷氏妻」。図五十八、図五十九の両図を見較べると、図五十八は、図五十九右半の重耳並びに、その三人の從者を欠いているが、負羈の右手に壺殮を持つことなどを始めとして、両図に深い関連のあることが知られよう。なお北魏司馬金龜墓出土木板漆画屏風にも、曹釐氏妻図が描かれていたようである(前述、残片a)。さて、本図は、図五十五の左端、図五十六の左に描かれた、曹釐氏妻図の源に当たる、貴重な図像と捉えられる。

25 孫叔敖母図(口絵25)

十 榜題「孫叔敖母」

図六十に掲げるのは、当墓の孫叔敖母図である。本図の基となった列女伝巻三・5の粗筋を示せば、次の通りである。

孫叔敖母梗概

楚の令尹(宰相)孫叔敖の母のことである。叔敖がまだ幼児であった時分、外で遊んでい



図六十一 孫叔敖母図

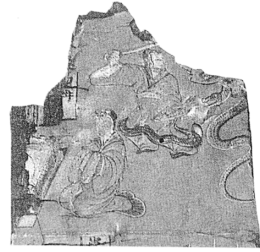
書経の中にも、「大いなる天は個々に鼻肩することなく、ただ善人のみを助ける」(商書「蔡仲之命」と述べられているではないか。だから、あなたは善行を表わすことなく、口を閉じているが良い。そうすれば、将来きつと楚の国で出世することが出来るよ」と。果たして叔敖は成長した後、令尹の位にまで上ったのである。

て、頭の二つある蛇を発見する。叔敖は直ちにそれを殺し、地中に埋める。そして、叔敖は家に帰るや、母親を見て泣き出した。母親が理由を尋ねると、叔敖が答えるには、「頭の二つある蛇を見た者は死ぬと聞いている。僕はつい先程、外で遊んでいる時、それを見てしまった」と。母が、「その蛇は今何処にいるのか」と問うと、叔敖は、「他の人がまたそれを見ることがないように、僕がそれを殺して地中に埋めた」と答える。すると、母は、次のように言い論じた。「あなたが死ぬようなことはない。何故なら、目に見えない善行に対しては、目に見える良い報いが齎されるからである。立派な行いは、悪い兆しに勝ち、また、仁というものには、全ての禍いを取り除く働きがある。天は高い所にあっても、低い地上のことを決して聴き逃しはしない。

本図も、右を向いて立つ、孫叔敖母を描いたものである。図六十一に、列女仁智図巻の4孫叔敖母図(榜題「叔敖母」「叔敖母」「楚孫叔敖」)、「叔敖見蛇、深知天道。叔敖見蛇、両道岐首。既埋而泣、母曰陰徳、必寿獲禄。終相楚国」と、図六十二に、伝顧愷之筆の摸刊図を、併せ掲げよう(榜題「叔敖母」「孫叔敖」)。この両図はやはり、深く関連するもので、右に母、左に左袖を目に当てる孫叔敖が、互いに向き合って立っている。即ち、両図は、頭の二つある蛇を殺して埋めた孫叔敖が、泣いているのを見て、母親が訳を尋ねている場面を表わしているのである。興味深いことに、もう一面、同じ場面の右に、孫叔敖が剣を振るい、頭の二つある蛇を殺そうとしている場面も、描き加えられている例がある。図六十三に示す、北魏司馬金竜墓出土木板漆画屏風の図像がそれである(榜題「母」、題記「叔敖母者、楚令尹孫叔敖之母也。叔敖為嬰時、見」



図六十二 孫叔敖母図(伝顧愷之筆摸刊)



図六十三 孫叔敖母図

図六十二に対応するものであることが明らかである。このことから、本図（図六十）に溯る列女伝図の粉本には、少なくとも図六十三に見られるような、連続する二場面を描いた、孫叔敖図のあったことが、推測されるのである。ともあれ、本図は、図六十一以下の三図を通じて描かれた、孫叔敖母図の源に当たることが疑いない。

26 魯滅孫母図（口絵 26）

十 「魯滅孫母」

図六十四は、当墓の魯滅孫母図である。榜題は薄れており、読み辛いが、何とか判読出来る。本図の典拠となった列女伝巻三・9の粗筋

を示せば、次の通りである。

魯滅孫母梗概

滅孫母というのは、

魯の大夫滅文仲

の母のことである。

或る時、文仲は、

魯の使者として、

齊の国に赴くことになった。母はそれを見送って、次のように言う。

「お前は、性格が酷薄で恩情がなく、人使いが荒い。困っている者は恐れ、魯の全体がお前のことを厄介者視している。それなのに、この度はお前を齊に赴かせようとする。大体、悪事というものは必ず非常時を狙って実行されるものである。お前に打撃を与えようとする者は、この機会にそれを実行する筈だから、よくよく気を付けよ。魯と齊は、城壁一つを隔てただけの隣国である。魯の多くの寵臣がお前に怨みを抱く一方で、齊の高官と通じ合ってもおり、その者達は、きつと齊に魯を攻撃させて、お前を抑留するに違いない。それを逃れることは極めて困難である。これからお前は、魯の人々に必ず広く恩情を施して、恩恵を与えるようにし、その後、齊に赴いて、救援を求めよ」と。そこで、文仲は、魯の上卿の三家を頼り、士大夫と懇ろになつてから、齊へ赴く。果たして齊は、文仲を拘禁し、兵を催して魯を攻めようとする。文仲は密かに人を使って、魯の君公へ手紙を送らせる。文仲は、



図六十四 魯滅孫母図

その手紙が斉の手に渡ることを恐れて、内容が知られることのないよう、手紙の文辞を迷文化して、次のように書いた。「小器に斂め、これを台に投ぜよ。獮犬に食らわせ、羊裘を組め。琴の合するは、甚だこれと思う。臧よ我が羊、羊に母有り。我に食らわしむるに同魚を以つてす。冠纓かんえい足らず、帯に余り有り」と。文仲の手紙を受け取った、魯の君公と大夫とが合議するが、誰にもその意味が分からない。或る人が、「臧孫母は、魯の官吏として代々俸禄を受け継ぐ家柄の女である。君公はどうして試しに臧孫母を呼んで、そのことを尋ねてみないのか」と言うので、早速臧孫母を呼び寄せて、「私が臧子を斉に赴かせた所、今その手紙を持って来て、このように述べているのは、どういう意味か」と聞くと、臧孫母は涙を流し、「我が子は拘禁されて、枷なせに繋がれている」と言う。君公が、「何故そのようなことが分かるのか」と問うと、臧孫母は答えて、次のように言う。「小器に斂め、これを台に投ぜよと言うのは、城外の民衆を集めて城内に入れよという意味である。獮犬に食らわせ、羊裘を組めと言うのは、急ぎ兵士に立派な食事を宛あてつて、その装備や武器を整えよということである。琴の合するは、甚だこれと思うと言うのは、妻を思うという意味である。臧よ我が羊、羊に母有りと言うのは、その妻によく母を養えと命じているのである。我に食らわしむるに、同魚を以つてすと言うのは、銅銅魚は、その鱗うろこの文から鑣やすりを指し、鑣は、鋸のこぎりを研ぐ道具であつて、鋸は即ち、木を治める道具である。だから、木治ありということ、それは、獄に繋がれるという意味である。冠纓足らず、帯に余り有りと言うのは、髪が乱れて梳すくことが出来ないこと、また、食物を得ること

が出来ず、飢えて瘦せてしまったということである。ここから、我が子の拘禁され、枷に繋がれていることが知られるのである」と。そこで、魯は、臧孫母の言葉によつて、国境周辺に軍隊を急展開させる。さて、斉が兵士を進発させ、魯を襲撃しようとするが、既に国境には魯の軍隊が展開していることを知つて、魯への攻撃を中止し、文仲を故国に帰したのである。

本図は、左を向いて立つ、魯臧孫母を描いたものだが、列女伝図としての他の類例が、管見に入らない。図六十五は、伝顧愷之筆の摸刊図を示したものである(榜題「臧孫母」「魯国君」。左端の女性が魯臧孫母で、魯の君公に、文仲からの手紙の謎解きをしている場面を表わしている。本図は、その魯臧孫母図の源に当たる、非常に貴重な図像と言えるであろう。



図六十五 魯臧孫母図 (伝顧愷之筆摸刊)

27 晋羊叔姬図 (口絵 27)

十 榜題「晋楊叔姬」

図六十六に、当墓の晋羊叔姬図を掲げる。榜題の楊字は、叔姬が羊



図六十六 晋羊叔姬図

通りである。

晋羊叔姬梗概

叔姬という女性は、羊舌子の妻で、叔向、叔魚兄弟の母である。また、別姓を楊氏とも称する。叔向の名は肸、叔魚の名は鮒と言う。その羊舌子は生来、正しいことを好んだので、晋の国では遂に受け容れられなかった。そこで、羊舌子は晋を去り、三室の邑（家三軒から成る小村）に行った。貧しい村人は、皆で羊を盗んで来て、羊舌子に贈ろうとするが、羊舌子はやはり受け取ろうとしない。その時、妻の叔姬が言うには、「そもそもあなたは、晋で受け容れられずに、この三室の邑へとやって来た。なのに、たった三軒しかない小村においてさえ、あなたがなお受け容れられない原因と言えば、それはあなたが余りに狭量、潔癖過ぎるからである。ここは、村人の好意としての羊を受け取った方が良い」と。それを聞いた羊舌子は、村人から羊を受け取っ

舌子の妻であることから、羊字が一般であるが、本の列女伝本文に、「叔姬者……一姓楊氏」と見える。本図の基づいた列女伝卷三・10の粗筋を示せば、次の通りである。羊舌子の妻であることよ。羊泥棒とは何の関わりもない」と言ったのである。

て、「肸と鮒にそれを煮てやれ」と言う。すると、叔姬が、「親の影響を受けて育つ子供達に、不義の肉（盗品）を食べさせてはならない。羊はそのまま埋めてしまい、あなたと関わりがないことを、証拠立ておくべきである」と言うので、羊舌子は羊を瓶に入れ、家の裏に埋めた。その二年後に羊の盗難が発覚し、都吏（都の役人）が羊舌子の所にやって来る。羊舌子が役人に、「私は羊を受け取りはしたが、食べてはいない」と言うので、役人が埋めた羊を掘り出して見ると、骨と化した羊が、そっくりそのまま残っている。役人は感嘆して、「羊舌子は君子であることよ。羊泥棒とは何の関わりもない」と言ったのである。

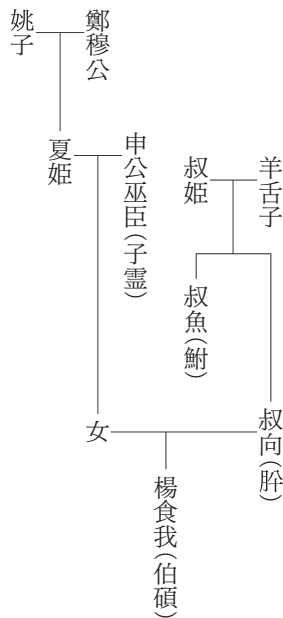
子供の叔向が、申公巫臣氏（字は、子靈）の女を嫁に迎えたがる。その嫁は、子靈の妻夏姫の女で、好色な美人であった。一方、母の叔姬は、自分の一族から嫁を迎えたく思う。叔向が、「母上の一族は、身分こそ高いが、庶子がない。私は、正妻の嫉妬深い舅氏（おじ。母の兄弟）のようになるのは絶対に厭だ」と言うと、叔姬は、次のように言う。「あなたの望む嫁の母即ち、子靈の妻というのは、かつて三夫、一君、一子を殺し、一國、両卿を滅ぼした、恐ろしい女である。あなたがそれを厭わず、私の一族を厭がるというのは、どうしたことか。私は、次のように聞いている。奇福（普通でない幸福）のある者は、必ず何時か奇禍に襲われ、尋常でない美しさを有するものは、必ず尋常でない悪を宿す、と。今の夏姫は、鄭穆公の若い妃、姚子の子で、子貉の妹である。その子貉は若死にして後嗣ぎがない。にも関わらず、天は夏姫の一身に美しさを集めた。これはきつと、天が夏姫

を通じ、誰かを破滅させようとしているのである。夏桀王、殷紂王、周幽王三代が滅びたのも、晋の恭太子申生が廃されたのも全て、未喜、姐己、褒姒また、驪姫という毒婦がいたためである。あなたは一体、どうしたいのか。およそ美人というものは人を動かし易く、それが徳義に基づいたものでなければ、必ず禍を呼ぶものなのである」と。叔向は、それを聞いて怖じ恐れ、一旦夏姫の女を断念するが、生憎晋平公が無理矢理に娶らせたので、その嫁はやがて楊食我を生む。食我は伯碩と呼ばれた。伯碩が生まれる時、侍者の知らせを受けた叔姫は、息子の所へ赴き、孫の顔を見ようとす。叔姫が産屋に近付くと、赤ん坊の泣き声が聞こえる。叔姫は突然、引き返し、「あれは豺狼(山犬と狼。酷いものの例え)の鳴き声である。忌まわしいことに、近く羊舌の家を滅ぼすのは、狼の本性を備えたあの子であるに違いない」と言つて、決して赤ん坊に会おうとはしなかった。案の定、伯碩は成長の後、祁勝と謀つて乱を起こし、晋の国人に殺された。先の叔姫の言葉通り、羊舌氏は、その事件が元で、遂に滅びてしまったのである。

叔魚を生んで間もなく、叔姫がその赤ん坊の未来を占つて言うには、「この子の欲望は谷底より深い。それを満たすことは到底、不可能である。ゆくゆく必ず賄賂を原因として、死ぬことであろう」と。かくて叔姫は赤ん坊の顔を見ようとしなかった。叔魚は長じて、代理判事となる。邢侯と雍子とが互いに領地を争つて、訴訟沙汰に及んだ時、雍子が女を叔魚の許に腰入れさせて、己れに有利な計らいを望んだので、一方の邢侯は怒り、朝廷において叔魚と雍子の二人を殺してしま

う。韓宣子はその事件のなりゆきを心配する。叔向は韓宣子に、「三人は共に同罪である。私は、生き残つた邢侯を死罪に処し、死んだ叔魚、雍子の二人を市場で曝し者とするよう勧めたい」と言つて、事件はそのように処置された。叔魚はやはり、かつて叔姫が予言した如くその欲深い心が原因となつて死んだのである。

羊叔姫をめぐる、列女伝の右の話は、中々複雑である。物語に登場する、主な人物の系図を示せば、次の如くである。



本図は、右を向いて立っている、晋羊叔姫を描いたものである。図六十七は、列女仁智図巻の9晋羊叔姫図を掲げたものである(傍題「晋羊叔姫」「叔向」「叔魚」「羊舌大夫」)。頌「叔向之母、察於叔魚食我、皆貪不正。必以貨死、果卒二分諍」。剝落部分は、列女伝本文によると、「情性推人之生以窮其命」十字となる。図六十七左端の、右を向いて立っている人物は、羊舌子であろうと思われるが、列女仁智図巻に、「羊舌大夫」と傍題される点が不審である。列女伝の



図六十七 晋羊叔姬图



図六十八 晋羊叔姬图（伝顧愷之筆摸刊）

羊舌子は、羊舌職のこととされ、羊舌大夫は、職の父に当たる人物だからである（左伝閔公二年に、羊舌大夫が晋太子申生の尉となったことが見え、「羊舌大夫為尉」、その杜預注に、「羊舌大夫、叔向祖父也」とある）。当図に、羊舌子の父の登場すべき必然性は、特に見当たらないから、列女仁智図卷の誤記であろう。とすれば、図六十七は、間に二人の子供（叔向と叔魚。共に左向きに立っている）を挟んで、叔姫（右）と瓶を持つ羊舌子（左）とが、立って対話している図と考

えられる。図六十八は、伝顧愷之筆の摸刊図を示したものである（榜題「晋羊舌子」「羊叔姬」）。当図は、図六十七の左右を反転させたもので、羊舌子は、右手に羊の頭を捧げ持ち、左手に瓶を下げている。図六十七に較べ、瓶が異様に大きいのは、左手の羊頭に合わせたものであろう。また、叔向、叔魚の二人の子供は、省略されてしまっている。注目すべきは、向きこそ逆になっているが、当図と図六十七における叔姫の姿形が、全く同じであることだろう。そして、本図（図六十六）は、例えば図六十八左の晋羊叔姬図の、ほぼ直接的とも言える、原図の面影を留めるものと見ることが出来るのである。

28 晋范氏母図（口絵28）

† 榜題「晋范氏母」

図六十九に、当墓の晋范氏母図を掲げる。本図は、西壁四層の最後の列女伝図となっている。また、列女伝卷三仁智伝からの最終図でもある。本図の基となった列女伝卷三・11の粗筋を示せば、次の通りである。

晋范氏母梗概

晋の范氏の母というのは、范献子の



図六十九 晋范氏母図



図七十 晋范氏母図

妻のことである。或る時、その三人の子供が趙氏の所へ遊びに行く。さて、趙簡子は乗馬が趣味で、その園中には木の切株が多い。趙簡子が三人の子に問うには、「切り株をどうしたら良いか」と。その時、一番年上の子は、「立派な君主はそのようなことを尋ねもせず、何もしないであらう。一方、乱君は何も尋ねずにさっさと民を使役し、切株を除かせてしまふであらう」と答えた。また、二番目の子は、「あなたがもし馬の足を大事に思われるのであれば、民の力を惜しまれるな。逆に、民の力を大切に思われるのであれば、馬の足のことなど放っておかれよ」と答えた。しかし、最も年下の子は、次のように答えた。「三つの恩徳を巧く使い、民を使役されるのが宜しい。例えばあなたが民に命じ、仮に山の切株を除かせたとしても、それは馬の便宜にしかならない。そこで、あなたは命令を変更して、今度は園の切株を除くよう命じる。すると、山は遠いが園は近いので、そのことが民

への第一の恩徳となる。また、民にとって作業が困難な、険しい山の仕事でなく、平地における楽な仕事に変わることで、それが民への第二の恩徳とならう。そして、除去の仕事が終わったから、不要な切株を集め、それを安い価で民に売ってやれば、そのことが第三の恩

徳となつて、あなたには正しく一石二鳥というものではないか」と。三子の言うことを面白く思った簡子が、そのようにしてみると、果して民は三度喜んだ。三番目の子供は、自分の編み出した詐術が自慢でならず、家に帰つて鼻高々と、事の次第を母に語り聞かせる。母親はそれを聞き、深く溜め息を吐いて、次のように言う。「遂に范氏を滅ぼしてしまうのは、きつとこの子に違いない。己れの功績を自慢することだけを考え、人を苦しめて何とも思わず、他人に対する慈愛の気持を抱くことが出来ない。偽計を詐術へ発展させることばかりで世渡りをしていて、どうして長らく無事でいられようか」と。その後、智伯が范氏を滅ぼしたのである。

本図は、左向きに立っている晋范氏母を描いたものである。図七十一に、列女仁智図巻最終画面の10晋范氏母図(榜題「中子」「長子」)、図七十一に、伝顧愷之筆の摸刊図(榜題「范氏中子」「范氏長子」「范



図七十一 晋范氏母図(伝顧愷之筆摸刊)

氏少子」「范氏母」を併せ掲げる。図七十は、残念なことに、画面左半の少子と母、また、頰を失っていることが明らかである。それにしても図七十と図七十一との酷似することが注目されよう。さて、本図は、例えば図七十一左端、晋范氏母図の源流をなすものと認められる。

付記 平成18―20年度科学研究費補助金基盤研究(B)による成果報告書『和

林格爾漢墓壁画孝子伝図輯録』(内蒙古自治区文物考古研究所、幼学の会編、平成21年)が公刊されたので、参照されたい。

〔注〕

(29) 図四十六は、容庚氏『漢武梁祠画像録』(考古学社専集13、北平燕京大学考古学社、民国25(一九三六)年に拠る(以下も同じ))。

(30) 図四十七は、『中央研究院歴史語言研究所藏 漢代石刻画像拓本精選集』(中央研究院歴史語言研究所、民国93(二〇〇四)年)8に拠る。

(31) 図四十八は、聞宥氏『四川漢代画像選集』(中国古典芸術出版社、一九五六年)四〇に拠る。

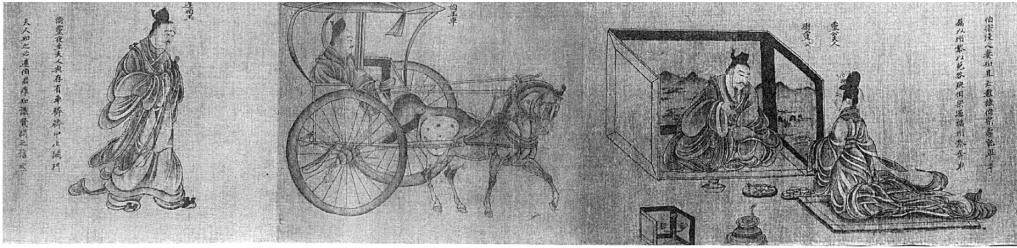
(32) 図五十五は、『中国歴代絵画』(故宫博物院藏画集1東晋、隋、唐、五代部分、人民美術出版社、一九七八年)に拠る(以下も同じ)。但し、場合により注⑩前掲のものも用いた。

(33) 列女仁智図巻の内容について、例えば古田氏注⑩前掲論文に、『列女伝』に記された物語の中から幾つかをピックアップして絵画化したもの」とされるのは、極めて不正確な記述で、列女伝巻三仁智伝の十五話を、図像化したものの残巻とすべきである。また、宮本氏注⑩前掲論文は、列女伝諸本に関する非常に重要且つ、優れた研究であるが、列女仁智図巻の内容について、その注注跋により、「現存する願愷之列女伝図の残巻(故宫博物院藏)は、仁智伝十五伝の中の八伝の図を伝えており」とされるのは、明らかに誤りで、列女仁智図巻は、十五

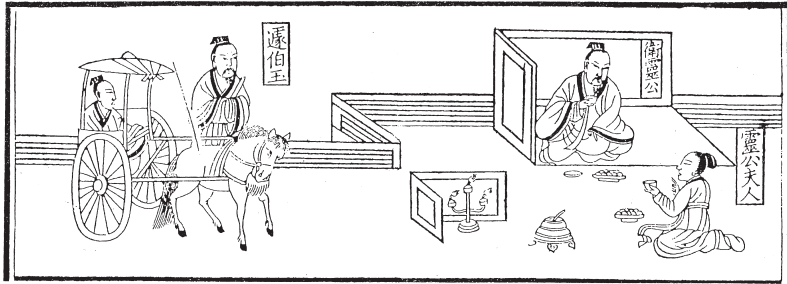
伝中の十伝の図を伝えているのである。改めて、その内容を示せば、次のようである(通番を付し、列女伝の巻・話数を添えた。†は、その図像が当墓にも存することを表わしている)。

- 1 楚武登曼図(巻三・2)
- 2 許穆夫人図(巻三・3) †
- 3 曹釐氏妻図(巻三・4) †
- 4 孫叔敖母図(巻三・5) †
- 5 晋伯宗妻図(巻三・6)
- 6 衛靈夫人図(巻三・7)
- 7 齊靈仲子図(巻三・8)
- 8 魯漆室女図(巻三・13) †
- 9 晋羊叔姬図(巻三・10) †
- 10 晋范氏母図(巻三・11) †

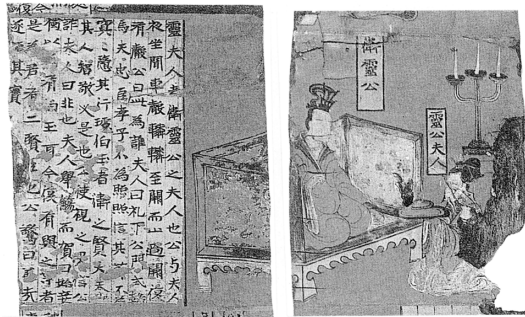
現存本は、右の十話の図像を有するが(但し、完全ではない)、列女伝巻三の内の、密康公母(巻三・1)、魯臧孫母(巻三・9)、魯公乘嬖(巻三・12)、魏曲沃負(巻三・14)、趙將括母(巻三・15)の五話の図像を欠いている。なお当該図巻は、登場人物の傍題及び、二行の頰を載せるが、列女伝の本文を載せることはない。さらに現存本には錯簡があつて、8魯漆室女図は本来、9、10の後に続くべきものである。また、その錯簡とも関わって、後に触れるように、8魯漆室女図は、図の右半を失っているらしく、また、7齊靈仲子図及び、10晋范氏母図は、図の左半並びに、頰を失っているようである。さて、この列女仁智図巻について、注目すべきは、例えば宮本氏がその6衛靈夫人図と、伝願愷之筆の摸刊図とを上げて、金維諾氏「願愷之的芸術成就」(『文物参考資料』一九五八・六)を参考に、「両者は」人物の形態や構図など幾つかの点で、完全に一致するところがあつて、「伝願愷之筆の摸刊図は」背景を増加したり服飾を改変したりして真を失つてはいるが、間違いなく宋代の模本、それも比較的完全な模本に依拠していることが分る」と述べ(このことは、伝願愷之筆摸刊本の阮福の跋文中に引かれる、父阮元の言、「其中衣冠人物、与此圖皆同」。



(列女仁智図巻)



(伝顧愷之筆摸刊)



(北魏司馬金竜墓出土木板漆画屏風)

参考図一 衛霊夫人図

若し衛霊公所坐之矮屏漆室女所倚之木柱、皆与顧
 図中相似。而微有所減に、早く指摘されており、
 阮元は当該図巻などを見たものと思われる(阮
 福注)、また、古田氏が同図と、司馬金竜墓出土木
 板漆画屏風の衛霊夫人図(第四・五塊表二層)とを
 上げて、
 この二つの作品は、先程の作例同様、同じ画題
 を同じように描いた言わば同一画題・同一図様
 の作例として興味深いものである。二つの作品
 には場面設定、画面構成、人物の形態や調度品
 等において共通した表現が認められ、物語を絵
 画化する際の作者の制作意識が、お互い極めて
 近いものであったことが窺われよう……このよ
 うな同一画題・同一図様というものの存在は、
 当時において物語をどう絵画化するかに関する
 決定は、製作者の意志判断に全面的に委ねられ
 たものではなかったことを意味している。こう
 した事実、この時代、既に作り手と受け手と
 の間には、図様に関するある一定の了解事項が
 成立していたことを物語るものであろう
 とされ、伝顧愷之筆の摸刊図と当該屏風との背後に、
 共通の粉本の存在していたことを、示唆しているこ
 とであろう(参考図一参照)。加えて、宮本氏は、
 列女仁智図巻と伝顧愷之筆摸刊本との一致について、
 阮福の跋文を踏まえ、唐宋人の摸本列女伝図、北宋
 米芾による高下三寸板の縮小摸刻(画史)からの両
 者の分岐を想定されているが(後述)、6衛霊夫人
 図のみならず、列女仁智図巻の十図は全て、伝顧愷
 之筆の摸刊図と非常に深く関わっていることを、こ
 こで確認しておきたい。そして、その深い関わり故

に、両者の図像が互いに相補い合う一面を有することにも、注意すべきである。例えば金氏前掲論文は、伝顧愷之筆の摸刊図と比較することによって、列女仁智図巻の7齊靈仲子図が、「太子光」の榜題を付け間違えていること、その左半に、「夫人仲子」「齊靈公」二人の人物を欠くこと（金氏は、「夫人、仲子、齊靈公三人均欠佚」と言われるが、誤りで「夫人仲子で一人」、二人である。また、金氏は指摘されていないが、頌も欠く）、8魯漆室女図の右半に、「隣婦」の図像を欠くこと、10晋范氏母図の左半に、「少子」「母」の二人の人物を欠くこと（頌も欠く）等を指摘されているが、なお列女仁智図巻、1楚武登曼図の左、楚武王と頌との間には、「屈瑕」「軍師」の図像のあった可能性がある。また、2許穆夫人図には、右半の二使者が左端に行き、母（傅母）と許穆夫人とが入れ替わる等、伝顧愷之筆の摸刊図における、人物の複雑な移動が起きているし（許穆夫人の榜題も欠けている）、3曹釐氏妻図には、左に「従者三人」「公子重耳」の図像があったかもしれない。6衛靈夫人図には、馬車の後に描かれた遽伯玉が、馬の向うに移されるという相違が見えるし、また、9晋羊叔姬図では、左右の二人が入れ替わり、中央の叔向、叔魚が省かれている他、列女仁智図巻は、「晋羊舌子」（摸刊図）の榜題を、「羊舌大夫」に誤る（羊舌大夫は、羊舌子の父）などの点を、付け加えることも出来る。ところで、列女仁智図巻が、図像と頌から成ることに關しては、頌が元来、別立して一篇を成していたことと共に（例えば漢書三十六楚元王伝六に、劉向の列女伝を「八篇」としていた）、前述の漢書芸文志に、「列女伝頌図」とあるものとの関わりが、極めて重要な問題となるであろう。また、劉向の七略別録（初学記二十五屏風三所引）に、
臣向与_三黃門侍郎_二歆_一所校_レ烈女伝、種類相從_レ為_三七篇、以著_三禍福榮辱之効是非得失之分、画_三之於屏風四堵_一と見える、列女伝図の「屏風四堵」と、当該図巻及び、伝顧愷之筆の摸刊図との関わりも、同様に問題とすべきであろう。何故なら、従来武氏祠画像石を例外として、顧愷之以前の列女伝図というものが殆ど知られなかったため、私達は、「列女伝頌図」（漢書）や列女伝図「屏

風四堵」（七略別録）の内容を推し量る術が、全くなかったのだが、今般、新たに知られることとなった、四十図を越える、当墓の列女伝図こそは、正しく顧愷之以前、後漢時代のその様式を伝えるもの以外ならず、劉向と顧愷之の列女伝図を繋ぐ遺品と捉えられるからである。
(34)前稿において、列女伝巻二・晋文齊姜図と推定した残片aは、注⑩前掲「山西大同石家寨北魏司馬金童墓」26頁に、残片aについて、「一高冠男子坐方榻上、後面三人拱手侍立。榜題『晋公子重耳』」と説明されており、これは正しく伝顧愷之筆の摸刊図右半と一致する。当該屏風にはまた、列女伝巻三・4曹釐之妻に続く、5孫叔敖母（第四・五塊表一層）も描かれていることなどから、その残片aは、晋文齊姜でなく、曹釐之妻図と見るべきであろう。ここで訂正しておきたい。
(35)本図は、列女伝巻三・11に該当するが、但し、南壁一層に、巻三・13魯漆室女図が描かれていることについては、前述の如くである。

（くろだ あきら 人文学科）

二〇〇九年十月十三日受理